

歯科医療の中に看護をもとめて

歯科口腔外科 発表者 池田 てるみ

I はじめに

社会の人々を健康に導くために種々の役割をもつ医療職員が患者を中心に働いている。

歯科医療では治療・手術・投薬等の医療行為以外に歯科補綴という歯牙を修復する行為が加わるので、歯科医を中心として、補綴業務に協力する職種に歯科技工士、口腔清掃や歯石除去、薬物塗布等予防業務の協力者に歯科衛生士、そして看護婦等がチームを組んで働いている。

そのうち歯科技工士を除いて、他の職種は直接患者に接している。その中に看護の独自の働きがあるだろうかという疑問が常にあったので、ワークサンプリングの業務分析によって看護婦の独自の働きを知ると共に、更に看護技術を生かすには、どうしたらよいか検討するため現状分析を行った。その結果を報告する。

II 現状分析

ワークサンプリング実施に当り

49年1年間の年令別、疾患別調査を実施した。その結果(別図1.2より)

1) 年令別統計では

20~30才代の患者が最も多く、ついで40才代 10才以下の小児へと続いている。

2) 疾患別調査では

歯牙硬組織の疾患が64.4%と圧倒的に多く、急性歯周炎や埋伏歯が6.5%、顎関節疾患が4.5%、腫瘍3.5%とつづいている。

歯牙疾患についてみると

乳歯については生後6カ月頃より歯の崩出が始まる。それにつれて歯牙疾患も増加している。小児期でも歯に関する関心をもつことによつて、ある程度のお蝕予防が出来るはずなので歯科衛生思想の普及が必要である。更に小児患者について、私達の業務の上では「非常に手がかる」ということです。

歯の硬組織疾患 歯周症以外の疾患については

幼児期、学童期には奇形や顎、顔面の発育異常や不正咬合の患者が多い。

18才頃より、第3大臼歯の崩出時期と共に不完全な崩出や炎症患者が圧倒的に多くなる。交通事故や転倒、転落等の原因による顎骨骨折や顎関節疾患も多い。

30代では、上顎洞根治手術後、数年してから現われる術後性頬部嚢胞や、神経疾患としての三叉神経痛がピークを示す。更に舌や歯肉に発生する腫瘍が増加し、40~60才代へとつづいている。他の疾患が年令の増加と共に減少しているのに対して、腫瘍は逆に増加している。

歯牙硬組織疾患以外では、外科的処置が加わることが多く、患者は精神的苦痛や不安を持つた

め、私達は患者の安全や安楽を考えて看護にあたる必要がある。

ワークサンプリングによる業務分析

ワークサンプリングとは、時点別業務分析の方法で、内容の集計項目は別図3の通り20項目作った。時点の決定については、10分間隔とし、1日30～36時点と無作為に選んだ。それを1週間集計すると、全体では920時点となった。歯科衛生士の方々にも協力していただき選ばれた時点に何をしていたか、すぐ記録することによって集団の業務量をつかんだ。

1) 調査期間 昭和50年2月18日～2月24日

2) 調査期間中の状況

○勤務者状況

歯科医師 6名 看護婦 2名 歯科衛生士 3名

○診療体制について

30分間隔の予約制を実施しており、調査期間中の診療は9時15分より最高16時15分迄行われていた。

○ワークサンプリング実施中の患者の状況をみると、来院患者270名中歯牙疾患57%歯周症が11.1%、炎症8.5%、顎関節疾患4%、不正咬合等、その他の疾患が10.4%となっている。

○更に処置件数では、歯牙疾患患者が多いため、保存、補綴等の歯牙処置が134件と多く、口腔外科的処置が72件、注射投薬等81件となっている。別図3よりワークサンプリングによる業務分析の結果診療処置介助が看護婦36.9%、歯科衛生士35.5%と大きいのは、外来では診療補助業務が主体であることを示している。これは歯科診療では、1人の患者に完全な治療を行うのに、術者と介補者の4つの手が必要であると言われてるように、直接、間接に私達の手が何らかの形で加わっていることを意味している。

ついで多い医療器具の取扱いは、看護婦14.5%、歯科衛生士20.7%で、歯科診療には必ず、材料や器具を使用するため、その準備や消毒 補充に大きな割合が占められている。

次の受付業務については、看護婦80%、歯科衛生士5.7%で、歯科外来では、出来る限り、チャーターサイドで患者のそばにと言う方針であるが、受付でのカルテの分類、配布、料金カードの取寄せ等の為に5～8%の大きな割合が占められているが、この点については今後改善していきたい問題である。

記録については、看護婦2.8%、歯科衛生士5.2%でそのおもなものは外来台帳の記載や検査依頼票の作成であり、外来では問題のある患者に接しても、看護記録をしていないが外来での看護のあり方について考える時、看護記録は是非必要なことではないかと思うので、今後考えていきたいと思う。

歯科衛生士、看護婦に於ける業務差について、業務分析の結果、歯科衛生士は弗素塗布や歯石除去等口腔衛生業務の面で、その独自の機能を発揮しており、看護婦では手術前後の観察や血圧測定等により患者の把握に目を向け、患者の安全や安楽のために知らず知らず、その独自の機能

が発揮されているのが、判明した。

以上がワークサンプリングによる業務分析の結果であるが、患者がこの現状をどう受けとめているか、アンケート調査した。

その結果では、

- 患者自身については、う蝕に気付いても相当長く放置したり、歯科受診中でも意識して歯を大切にすることが少なかったりである。
- 看護婦や歯科衛生士に対する要望事項として、歯石をとってほしい。手術時不安なのでそばにいて声をかけてほしい。待時間に声をかけて欲しい。等あった。

Ⅲ 考 察

以上が現状の結果であるが、一般に歯科に於いて看護婦の役割が少ないと思われた原因として

1. 歯科外来業務の中では技術的処置が多い
2. 歯科医療に対する認識不足
3. 他の職種と一語に働いたことがなく、他の職種に対して理解が少ない。
4. 看護行為が技術評価されていない
5. 歯を軽視する風潮がある 等あるが、

ワークサンプリングによる業務分析の結果を更に業務整理に役立てたいと考え検討した結果、処置内容として、保存、補綴処置以外に外科的処置件数が1週間のうち72件と多くあり、現状では手術介助に歯科衛生士が当たっている場合もあり、患者の不安の大きいことも考え、又患者の安楽や安全を守り上からも、看護婦がタッチするのが望ましく、又歯牙疾患患者の予防業務に対しては、歯科衛生士があたるのが望ましいと思われる。

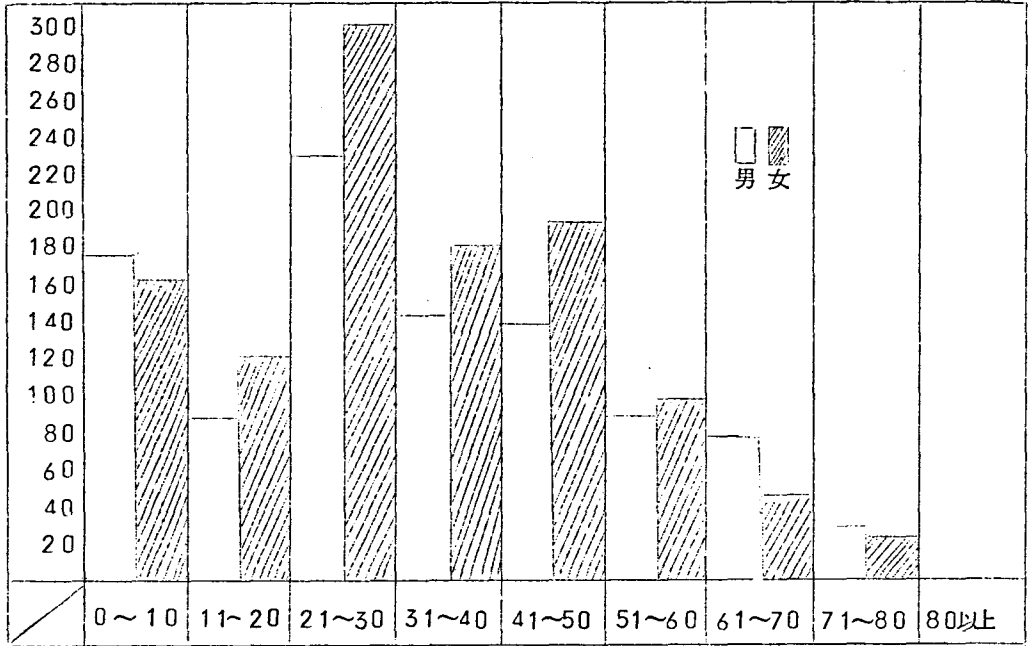
Ⅳ お わ り に

今後は歯科外来の中で患者と看護婦とのかわり合いをもっと深め、看護婦としての独自の働きを多くすると共に、他の職種の人も、よりよい人間関係をつくり上げ、患者の要求あるいは必要とする看護サービスに対して、積極的に取入れたいと思っている。

最後に、この調査研究にあたり、御指導いただいた短大看護科桑田先生に深く感謝致します。

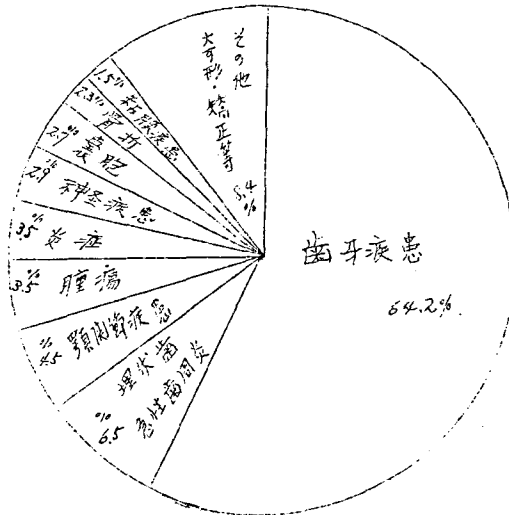
当院歯科医療の実態

49年度年令別統計 (別図1)



当院歯科疾患別 外来患者統計(49年) 図2

WHO基準により分類後集計



ワークサンプリングによる調査結果

(図3)

